

路面店型 設計事務所

渡邊貴明

栃木県鹿沼市に設計事務所を開いたのは2014年である。鹿沼は人口約95,000人の地方都市である。事務所は市役所に近い国道の交差点の角で、近世期には京都と日光を結ぶ例幣使街道の宿場町だったエリアである。当時の絵図に商店が建ち並ぶ様子が残る。それら商店は、今は軒並みシャッターが降ろされた仕舞屋に変わっている。車通りは多いが通過交通がほとんどで、歩く人は疎らで、往時の賑わいはない。そのエリアにある、戦後の棟割り長屋の一室が事務所である。

この棟割り長屋は木造2階建てで、路面には錆びたシャッターが降りている。20年間空き店舗だという。シャッターを上げると路面は全面透明ガラス張りである。室内からは交差点の様子がよく見渡せる。むしろ交差点の一部のような開かれた一室である。都市風景の変化が少ない旧市街にある、20年間もまちと関係を絶っているここを事務所にし明かりを灯せば、新しい交差点の風景として強い印象をまちに与えられると思った。

以前勤めていた事務所はマンションの一室に数人のスタッフが机を並べるスタイルで、よい空間を設計するという熱気で充満した密度の高い仕事場だったが、いつからかその熱気が閉塞感に変わり、ついに息苦しくなって身体を壊した。また、設計事務所というのは一般に馴染みが薄い。人々の日々の生活空間を設計する立場でありながら、その仕事の様子が隠蔽されていることに強い違和感を持っていた。

そこで自分の事務所である。

中央に、大きなテーブルを一つ置く。そこで製図、模型、打合せなどすべての作業を行う。路面から見てその背後に天井、間口いっぱいの棚を置く。棚には蔵書や模型を収める。スタッフの作業の背景に蔵書や模型が見える。室内とまちの境にあるのは透明なガラスだけである。事務所の活動と増えていく蔵書や模型がそのままこの事務所の立面になるわけである。設計し引き渡された建物だけでなく、そこに至る平時の設計業務の過程も風景としてまちに提供する。

鹿沼はもともと宿場町である。通り際のミセに立つ商人や職人の姿がそこそこにあった。仕事の過程がまちに表出していた。そういう風景をもう一度つくりたいのである。



建築設計室わたなべ 代表

1985年栃木県鹿沼市生まれ。関東学院大学人間環境学部人間環境デザイン学科(現、共生デザイン学科)卒業、宇都宮大学大学院工学研究科修士。一級建築士。関東学院大学非常勤講師。LOCAL REPUBLIC AWARD 2018最優秀賞を共同受賞